

## 小論文問題用紙

問題 次の文章を読んで、「無知そのものは無垢」ということについて、あなたの考えを述べなさい。字数は七〇〇字以上八〇〇字以下とします。

人は年を取るほどに辞典にたよるようになり、また辞典をひくことに楽しみも覚えるようになるというのに、年を取るほどに視力が衰える。これは人生の理不尽のひとつである。私などは近視、乱視、老眼の三重苦であるが、辞典のややこまかい説明を読み取ろうとする時には、眼鏡をはずして、ページに低い鼻の先が触れそうなまでに、裸眼を近づけなくてはならない。そのため視野がどうしても狭まるので、当の項目をしばし探りあてかねて、視線がその前後をうろろとさまよう、やがて、ぼんやりしてしまふ、ということがのべつある。

「年を取るほどに辞典をひく必要も楽しみもまさる、とあなたは言っているが、辞典のことでは若い頃から、われわれを相当にこき使ってきたではないか」と両眼が苦情を言う。もつともなことだ。

それでも年々、辞典をひく必要が増すその理由の第一は、恥ずかしながら、よくよく知っているはずの文字や言葉や事柄をじつにしばしば、俄に失念する、という情ない事情にある。これは老耄の兆しや走りと呼べばそれで済むことなのだらうが、しかしそれにはその機微があるのだ。失念とは、長年の馴れを破って、もうあるはずもない初心がよみがえり、それまでの固定した知識に訝りを示すということでもある。

たとえば「情」は、「情ない事情」と書けばつまらずに通つただらうに、「情ない事情」としたばつかりに、「情」の字の重なりにごだわり、俄に意味がわからなくなった。書いたあとからわからなくなるのも、失念のひとつである。そこで辞典にたずねる。すると「情」には、「ありさま」とか「事の実際」とか「まこと」の意味があり、こちらが本来であるらしい。なるほど、「情勢」とか「情況」とかいう言葉は日頃から気安く使っている。しかし試しに、情事という剣呑な言葉の項を眺めると、「心のまこと」とか「事の真相」とかいう意味が先に来ているのではないか。さらに「情実」を眺めれば、「ありのままの事実」とか「偽りのない気持」とか。

なるほど、情にも動かされるが、「情」という文字にも動かされるわけである。そんな意味があつたとは知らなかった、とはしかし、言えないのだ。それを知らなくては、おそろく、「情」という文字は半分も使いこなせないだらう。かりに辞典にあつたことはないにせよ、文字と文字との、言葉と言葉との、関係や力動からして、先刻、心得ていたことのはずなのだ。ところが、未知の領分へ踏み入っていくほどに、なにやら、すべてが既知感をおびてくる不思議さ、その戦慄……とはたしか或る探検家の言葉であつたと思うが、言語生活においてはそれは逆で、既知感が極まると、つまり飽和して凝固しかかると、そこから訝りが、未知感がおのずと生じて、やがて未知に行きあたるといった境地が随所にあり、戦慄とまではならなくても、やはり不思議なときめきをともなう。

よくよく知っているはずのことを俄に失念するということは、知つたつもりの人たちのやりとりの間で、子供がつぶらな眼をふつとあげて、自明なはずのことをたずねるのに似ている。そこで腹を立てずに、面倒でも、初心に寄り添つて物をたずねてみるのが、辞典をひく醍醐味である。そこで新しい知識に出会えれば、あるいは古い知識に一段と深い、懐かしい相において再会できれば、この上もない幸せとしなくてはならない。半端なまま頭に引つ掛けて暮らすのは、いらだたしいものである。

しかしその出会いのあとでは、また忘れるものなら、忘れるままにまかす、というほどの度量をもっていたほうがよろしい、と私は考える者だ。いったん得た知識をすこしの間も忘れまいとするのは、直接の必要に迫られているならいざ知らず、煙製や干物やカンヅメにして保存するようで、私は好きでない。それでは、知識は育たない。知識はふたたび忘失の海へ放流して回遊させるにかぎる。手もとに引き寄せたくなつたら、海へ舟を漕ぎ出して、網を打てばよいのだ。縁があるものなら、むしろから網にかかってくる。さしあたり縁がないようなら、またの機会を待つよりほかにない。

辞典に添って言うならば、辞典とは同じところを幾度でもひくものなのだ。われわれはしばしば辞典にたいして腹を立てる。やれ、分厚すぎるとか。やれ、字がこまかすぎるとか。やれ、説明が詳細すぎて、今の自分に必要もないことばかり、ゴチャゴチャ書いてあるとか。辞典を壁へ投げつけたことのある人も少なくないだらう。しかし辞典に関してわれわれがもつとも逆上するのは、以前苦労してひいて、読み取つたその箇所を、また苦労してひいていることに気がつく時だ。荒涼たる反復感に苦しめられる。しかし、それはまるきりの反復ではないのだ。以前とは、たずねる心も、たずねる深みも、おのずと異なると考えるべきなのだ。人生に二度、同じあり来たり単語を同じように、わざわざ辞典にあたって見たとする。その二度の機縁をそれぞれその時の心境とその前後の経緯もふくめて、ささやかな事ながらつづさに、こまやかに思い出して、淡泊に書き留めたなら、すぐれた短篇小説が出来るというぐらゐのものだ。

さらに辞典をまめにひく楽しみは、自分の知らぬことを蔑む、嘲る、あげくは憎むという現代人の病いにたいする、良薬となるはずだ。無知そのものは無垢ということも、辞典をまめにひいていけば、実感されるだらう。

(古井由吉の文章による)

注1 のべつ……ひっきりなしに。

注2 老耄……老い衰えること。

注3 剣呑……危ないさま。